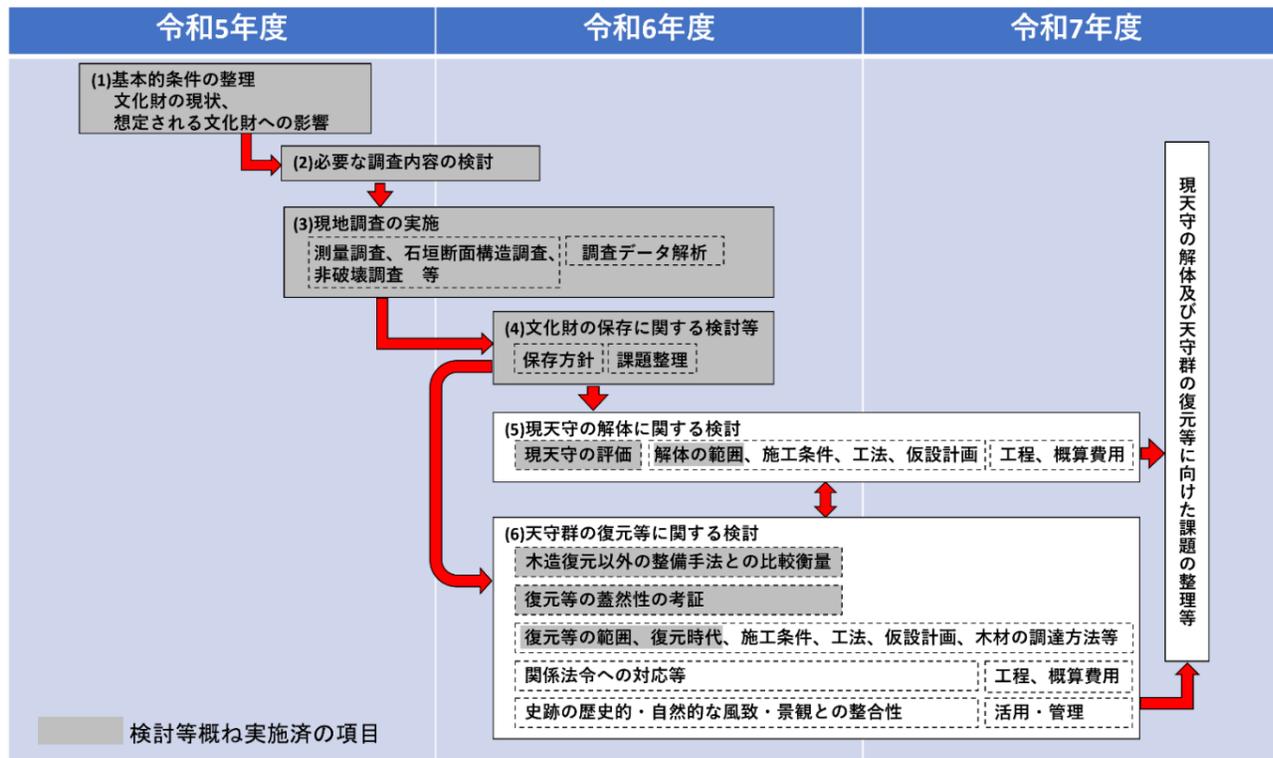


広島城天守の木造復元に向けた調査・検討状況等について

1 目的

広島城天守の木造復元の実現可能性を高めるため、現天守の解体及び天守群の復元等（復元又は復元的整備をいう。）において想定される様々な技術的課題等について、基礎的な調査・検討を行う。

調査・検討フロー



2 検討体制

(1) 広島城天守の木造復元に向けた技術検討業務委託（令和5～7年度）

- ア 請負者 清水建設㈱広島支店
イ 再委託先 ㈱文化財保存計画協会、㈱大崎総合研究所、㈱計測リサーチコンサルタント

(2) 広島城天守の復元等に関する検討会議の設置

現天守の解体及び天守群の復元等に係る専門的な意見を聴取するため、有識者による「広島城天守の復元等に関する検討会議」（全9回開催予定）を設置し、これまでに5回開催した。

3 これまでの主な調査・検討状況

(1) 天守群の復元等に関する検討

天守群の復元等について、以下の整理・検討を行った。

ア 木造復元及びその他整備手法の比較衡量

①木造復元、②耐震改修による現天守の継続利用、③現天守の解体を基本とする整備について、下表のとおり比較衡量を行った結果、検討会議において、①木造復元が望ましいとの見解で一致した。

①木造復元	②耐震改修による現天守の継続利用	③現天守の解体を基本とする整備
<ul style="list-style-type: none"> 往時の先駆的な天守構造と壮大な建築物群の体感が可能となり、天守建築への理解を促すことができる。 被爆以前の広島市の歴史や復興の歴史を伝える象徴的な存在として市民等に認知されることが期待できる。 一定の周期で修理を行うことで半永久的に機能を維持することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内部空間は本来の天守とは全く異なり、木造復元ほど天守建築への理解促進には繋がらない。 戦災復興の象徴としての価値は持続するが、広島城天守本来の歴史的・文化的価値は伝えきれない。 耐震改修を実施したとしても、建築物としての長寿命化を図ることはできない。 	<ul style="list-style-type: none"> 現地に天守台が残るだけで、往時に天守が存在した事実や天守の姿形の理解に繋がらない。

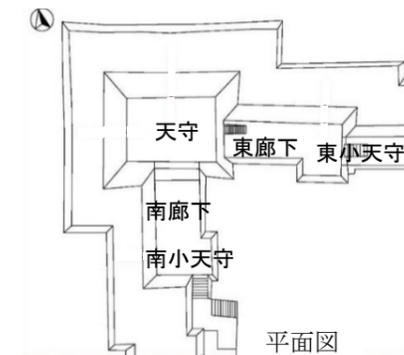
イ 復元等の範囲及び復元時代

復元等の範囲（案①天守+廊下の一部、案②天守+廊下、案③天守群全体）及び復元時代について、文化庁の「史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準」等との整合性を踏まえ検討を行った。その結果、検討会議において、復元等の範囲は、建造物の価値が最も顕在化する「案③天守群全体」が、史跡の本質的価値の向上や理解促進等の観点から整備効果が一番高く、また、復元時代は、古写真において天守外観や東小天守がうかがい知ることができる「幕末から明治初期」の時期とすることが妥当であるとの見解で一致した。

なお、天守群全体の復元等を行うためには、すべての対象建造物において、発掘調査で良好な状態の遺構が確認される必要がある。



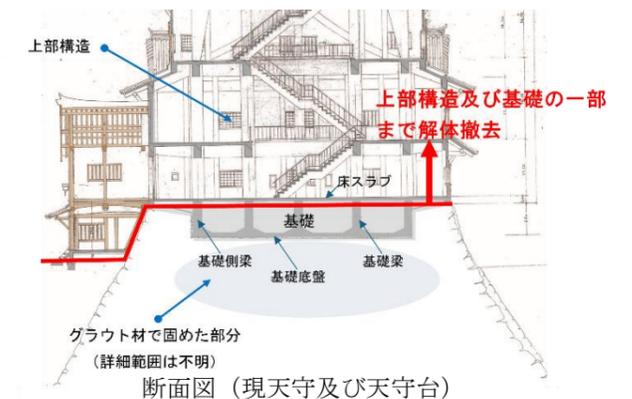
広島城大小天守模型（島充作）



平面図

(2) 現天守の解体に関する検討

史実に忠実な復元や文化財の保存の観点から、現天守の解体範囲について検討を行った結果、天守土台廻りの忠実な復元や石垣の倒壊・損傷防止につながるなどの理由により、上部構造及び基礎の一部まで解体撤去することを最有力案とし、今後検討を進める。

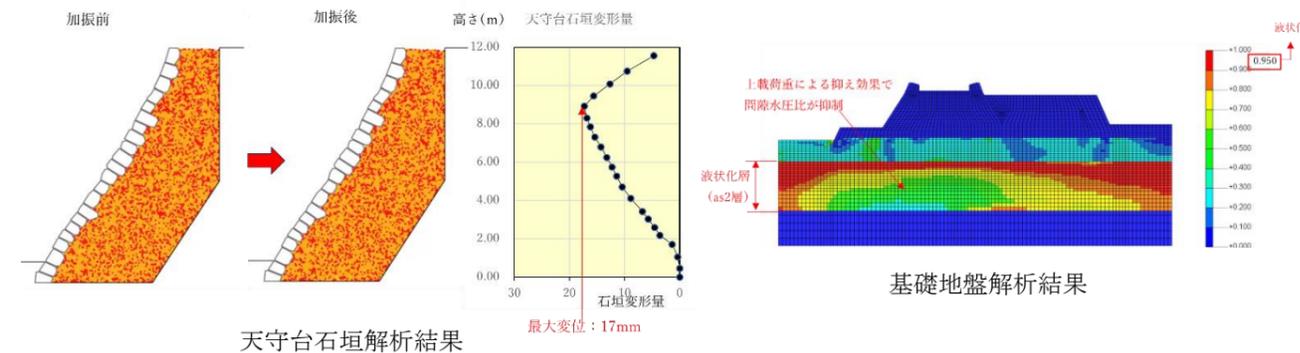


断面図（現天守及び天守台）

(3) 石垣の安定性に関する検討

大規模地震発生時の石垣の安定性について、現地調査データを解析したところ以下の結果となった。引き続き、不足する部分について調査を進める。

- 石垣は変形するが、崩壊には至らず安定した状況であると考えられる。
- 地盤の一部の層で液状化が生じるが、これが衝撃を吸収するとともに、上部の非液状化層が安定性を確保するため、地震等による液状化の地盤変状の影響は小さいものと考えられる。



4 今後のスケジュール

引き続き、現天守の解体及び天守群の復元等に関する検討を行い、令和7年12月を目途に、検討会議等での意見を踏まえ、最終取りまとめを行う。